グルとどう付き合うか

池亀　彩（大学院情報学環、東洋文化研究所（兼）、准教授）

1「スピリチュアル」の罠

「グルについて研究しています」というと、よく返ってくるのが「オウム真理教のアレですか？」という反応だ。「グル」という言葉は、彼らの一連のパフォーマンスとその後引き起こしたおぞましい事件によって、日本人の記憶の中で特別な位置を占めてしまっている。だが、新しい傾向も現れているようだ。近年の静かなスピリチュアル・ブームによって、ヨガやマインド・フルネスなどとともに、インド出身のグルたちが日本でも人気を集めているらしい。

インド人グルたちが提供しているように見えるのは、凡庸な日常生活を逸脱し、自らの殻を打ち破るような経験であり、物質主義に浸りきった現代社会とは別の「スピリチュアル」な世界への導きである。好むにせよ、好まざるにせよ、現代日本人が考える「宗教」とは、こうしたスピリチュアルな経験を提供するもので、どうもインドはそうした「宗教」の聖地のような場所と思われているようである。

グルとは、サンスクリット語の「重々しい、荘重な」という意味の *guru* から派生した語で、師や指導者を指す。シシャ（あるいはチェラ）と呼ばれる弟子は、グルへの絶対的な帰依と服従という関係のなかで教えを受け、宗教的な覚醒を目指す。グルとシシャの関係は、宗教的な領域に限定されるわけではない。音楽や踊りなどの芸能、あるいは学者の間でもグルとシシャの関係は形成される。グルは、このような個人的で濃密な師弟関係を形成する一方で、信徒集団（バクタ）とのより広い信仰関係を結ぶ。むしろ村落社会で生きる多くのインド人にとっては、後者の関係性の方が重要である。グルへの奉仕を第一とし、社会から隔離されたアーシュラムで宗教的教義や芸能に生涯を捧げられる人は当然ながら多くはない。

私が調査している南インドの農村社会に住む人々にとって、グルがいるかどうかは、時に死活問題となる。彼らにとってグルは、非日常の世界を開示しスピリチュアルな欲求を満たす存在ではなく、むしろ日常的の中で極めて物質的な必要や希望に応える存在である。南インドの農村社会でのグルの活動を紹介すると、「宗教的な側面はないのですか？」と聞かれ答えに困ることがある。むしろ何を我々が「宗教的」と考えるかを見直すべきなのかもしれない。

2　月曜日のグル

私が研究の対象としているグルたちは、村落社会で様々な社会活動を行なっている。彼らは地元の有力農民が開催する様々なイベントに特別ゲストとして顔をだす。グルのスピーチでは、宗教的な物語や叙事詩を引用しながら社会倫理を語るのが一般的だが、政治的な発言を行うこともあるし、より現実的で生活に直結した話をすることも多い。私がグルに同行すると、私もゲストとしてスピーチをさせられる。そこではいつも当たり障りのない抽象的な話で場をしのぐのだが、その後に続くグルの話に驚かされることが多い。ありがたいお話でもするのかと期待していると、いきなり「この村から近くの町まではどうやって行っているんだ？」「バスはないのか？」「じゃあ、俺が政治家に掛け合ってバス路線を作ってもらうようにする」などとあまりに直裁的な（しかし日常生活にとって重要な）話を始めるのだ。

農村地域をひっきりなしに回っているグルにとって、月曜日はマタと呼ばれる僧院にいて、信者や地域住民と会う機会を作っていることが多い。月曜日は農作業を休む日だからである。シリゲレという村にある僧院は、地元の土地持ちカーストを信者集団とし、近隣の数県においい

図 1.　鉱山会社と村人の仲介をするグル。
これは村人との集会の途中で大臣に電話をかけているところ。

図 2.　ダリト神学の信者たちによるデモンストレーション。
政府に対して土地を与えるよう要求している。

て最も政治的影響力のある僧院である。ここでは月曜日にニヤーヤ・ピータ（直訳すると正義の座）というインフォーマルな「裁判所」が開かれる。「裁判所」ではグルが唯一の裁判官であり、訴えた側も訴えられた側も法的な代理人を立てない。「裁判所」が任命した仲介人が事件の内容を事前に調べ、グルに報告する。その後、被告と原告の両者が自らの主張をグルの前で展開する。持ち込まれる揉め事は、夫が「二度目の結婚」（重婚は違法だがヒンドゥーの農民カーストの中では珍しくない）をしたために生前贈与を求める一番目の妻からの訴え、親が死んだ後の遺産分与で揉めている兄弟の仲裁などが多い。多くの案件はそもそも法の外でのことなので（例えば重婚）、通常の法廷に持ち込みにくいということもあるが、インドの司法制度そのものが訴えの多さのために正常に機能していないということもある。また、個人間の揉め事の他に、村人たちが集団で、地元の鉱山会社を訴えたり、政府が認可したプロジェクトが進まないのでグルに助けを求めに来ることもある。グルは、法廷に集まった人々の前で、政治家や起業家、地元の名士たち、政府の役人に次から次へと電話をかけ、問題を解決していく。その様は、彼がビッグマンであることの最も可視的で顕示的なパフォーマンスである。

旧不可触民で、現在は「虐げられた人々」という意味のダリトと自称する集団にもグルはいる。ダリトのグルの一人で、「ダリト神学」を提唱するグルは、毎週月曜日に「ダリト・ダルシャン」（現在はアディジャン・ダルシャンと改称）を開く。ダルシャンとは神にお参りすることや王に謁見することだが、そこには神や王と視覚を通じた「見る・見られる」という相互的なコミュニケーションが中核にある。グルたちに会うこと（あるいは姿を見ること）もまた

ダルシャンであり、彼らを見るだけで徳を得られるという信者もいる。さて、このダリト・グルのダルシャンでは、グルに会うというのが目的ではない。彼は、政府や土地持ち農民に土地を奪われた農業労働者のダリトたちに本来彼らの所有地である土地を回復するために集団裁判（この場合は公的な裁判所に訴え出る）をする運動をしており、そのために法律や裁判に詳しい活動家がアドバイスを与えたり、農民たちが裁判に必要な書類を持ってきたりする日なのだ。司法裁判をすると決めた貧しいダリトの人々が帰り際にグルに会いにやって来る。本来自分の所有である土地を取り戻すことは当然のことなのだが、そのことでカースト制度の根強い村落部でどんな報復が待っているか。土地持ちカーストから妬まれたら、どんな仕打ちを受けるか。不安は尽きないはずだ。「アッパージー、これからどうなるかねー」とボソボソと語る年老いたダリトの女性に、グルは「自分でやると決めた戦いだろう。最後までやらなきゃダメだよ」と勇気づける。最後に両者が「ジャイ・ビン」（ビンに勝利を、ビンとはダリト解放運動の父であるB･R･アンベドカールのこと）と拳を握り片手をあげるダリト独特の挨拶をした瞬間、グルと信者という上下関係は立ち消え、両者は対等な同志となる。

3　サンニヤーシ（出家）の新しい意味

インドの農村社会で活躍しているグルたちは、なかなか動かない政府や遥かかなたの国際社会と農民とをつなぐ媒介者である。彼らがいるおかげで、紙の上では認可されている灌漑プロジェクトが動き出したり、国際NGOからの資金によって電気の通らないダリトの家々にソーラーランプが持ち込まれたりする。延々と書類だけが回され、一つの部署から次の部署へ進む度に賄賂が要求されるインド行政（あるグルは「ゆっくりとしか動かない象」と形容する）の障壁を乗り越えて、州首相に直接電話をかけ、時には脅すことまでして、プロジェクトを進める。こうしたグルの手腕そのものが信者からのさらなる信用・信頼（*nambike*）を生むのである。

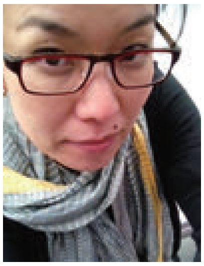
こうしたグルたちの活躍を見て、それまでグルを持たなかった低カーストもまた自分たちのグルを担ぎ出している。ダリトも含む低カーストの青年たち（少ないが女性も）に、宗教的イニシエーションを与える増院やアーシュラムでトレーニングを積んだ若いグルたちが新たに「カースト・グル」として出身カーストの利益を代弁し始めている。なぜ、すでにいるカースト政治家ではダメなのか。多くの人は、出家者であるグルと親族を持つ政治家とを対比させる。グルは出家者であるために腐敗しないというのだ。親族がいる政治家は嫌が応にも腐敗せざるを得ない。一方、グルは古い親族関係を断ち切ることで親族を超えた、より広いコミュニティーと新たな親族関係を結び、そしてコミュニティーのために働く純粋な公僕となると信じられている。ここにはセキュラリズムの議論からは見えてこない、宗教と公共性との関係が現れている。信者たちがグルに寄せる信頼・信仰

（*nambike*）は、グルがいかに公共に奉仕したかにかかっており、また同時に信者たちの信頼があるからこそ、グルが導く地域社会のガバナンスが成立するのだ。

4　小さな怪物

ホッブスの国家主権論に従えば、人は「万人の万人に対する闘争」を避けるために自然権の一部を放棄して、唯一の主権者（コモンウェルス）にそれを委ねる。唯一の主権者＝国家はまた臣民の抵抗を許さない絶対的な存在であり、だからこそホッブスはそれを「リヴァイアサン（海の怪物）」と呼んだ。これをグルと信者たちの関係に照らし合わせてみると、ある種の共通点と差異が見えてくる。信者たちは一定の自己決定権を放棄し、グルにその意思決定を委ねる（これを帰依というのは言い過ぎだろうか？）。親族関係を超越したグルがいることによって様々な問題が解決される。グルは物理的な暴力こそ行使しないもの、グルに反することは地域社会で生きて行くことを不可能にする。人々は汚職に浸かりきった警察に対して恐れ（*bhaya*）はないという。だがグルへの恐れは確実に存在する。

ホッブスの怪物が唯一絶対的な存在であるのに対し、グルと国家の関係は複雑である。グルの恩恵を受ける村人にとって、グルは国家のオルタナティブであるようにも見える一方、グルなしに国家は動かない（その逆も然り）。グルはインド民主主義の闇であり、また希望でもあるのだ。



池亀　彩（いけがめ・あや）

［生年月］1969 年 11 月 7 日生
［専攻領域］社会人類学、南アジア研究
［主たる著書・論文］
Ikegame, Aya 2012 *Princely India Re-imagined: A Historical Anthropology of Mysore from 1799 to the present,* London: Routledge.
Ikegame, Aya and Jacob Copeman（eds.）2012 *The Guru in South Asia: New Interdisciplinary Perspectives,* London: Routledge.
Ikegame, Aya 2017 'Moral Transcendence? the guru in democracy', *Seminar,* Seminar Publications, New Delhi, no. 693: 56-58.
Ikegame, Aya 2015 'Overlapping Sovereignities: Gurus and Citizenship.' In *Citizenship after Orientalism.* E. Isin（ed.）. New York: Palgrave
池亀彩 2015「グル」三尾稔・杉本良男 編 現代インド 第 6 巻『還流する文化と宗教』東京大学出版会 .
［所属学会］日本南アジア学会、日本文化人類学会、European Association for Modern South Asian Studies（EAMSAS）, British Association for South Asian Studies（BASAS）